



リステラス星圏史略  
古資料ファイル 4－6  
『皇女戦記』（暗洞界編）

（発掘整理作業中）

霧樹里守 is 土岐真扉

「天使ィ?! 冗談でしょ!」 (小6か? 中学1年?)

---

「天使ィ?! 冗談でしょ!」 (小6か? 中学1年?)

2016年6月3日 リステラス星圏史略 (創作)



2006年7月21日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

- アガータ 曾祖母がティクト、赤いバサバサの髪、ソバカス、かなり器量良しであるが、ドロをぬってごまかしている。ボルドムント、意地っ張り、強情、"愛情"の存在を追いかけている。マーシャたちがとらわれた時、連行される前後に逃がす。(12~13ごろ)
- 14歳になった時、だれもいないと思って顔のどろを落として水鏡に問いかけていると、酔っばらいのころつきどもに見つかって、父親まで含めた15~6人もの男たちに強姦されてしまう。
- .....「もうおしまい.....鋭が好きだったのに。ボルドムントでも軽蔑しないって言ってくれたのに.....」
- 一年たって、ただ一人の理解者だった母親も死に、生まれたばかりの子供とバラバラに父親の酒とバクチのために奴隷として売りとばされる時、ダレムアスへ逃げようと決意する。

「救われないわね.....」

「母さんが死んで あたいが売りとばされたら、生まれたばかりのこの子は、だれが育てるんだい?!  
親父がだれだろうと、この子はあたいの子なのに!!

どうしてさ! あたいたちはなんにもしてないのに どうしてこんな目にあわなきゃならないのサ!?  
ただ弱いってだけで こんな目にあうんなら  
ボルドムなんかなくなっちまえ!!

途中、再びとらわれていたマーシャとたまたま同じ牢に入れられ、猫目っ娘(ねこめっこ)の助けを借りて無事に脱出する。その後はキャラバンやあちこちのかくれがでマーシャの従女になりながら、西方(モルナス)皇子マデイルに切りかかられたりしながら少しづつダレムアスの習慣を身につけていく.....。

○ 猫目っ娘（ねこめっこ） 真っ赤な肌、目の色は名の通り、髪赤。

生まれてこのかたわずかに 腰に ポロをつけている

以外、服を着たことはない。

「あたいは猫目っ娘。親なんざァ知らないよ。

別段あんたを すけたかったァわけじゃアない。

ダレムアスが生きのころうがつぶれようが

そんなことにゃ 興味ないが、戦争の方はもうちっと、

続いてもらわにゃ 困るのさ。あたいたちが

行動をおこすまで……。

魔王をたおして もうちっと ぐらしやすい国を

つくるのさ」

☆ 『ボルドムの王子』 第一部より最終シーン (@中学2年～高校2年のどこか?)

2006年7月25日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

アリト (王子ラーリエクター) <双子  
少年王 ラリン  
妖女 (あやめ)  
棘皮 (じんぴ)

歩み寄って行くリランの横顔は幾分色褪めていたが、全くの平静を保っているように見受けられた。

—美しい少年王はアリトの三歩手前で立ち止まる。—わずかに手を上げて衛士を退がらせる、彼の表情を読みとれる位置にある者はアリト自身のみになる。

リレキスは10m程手前で足を止めた。美しい少年王はそのまま歩み続け、縄を打たれて処刑を待つ宰相嫡子・アリトの、三歩手前で立ち止まる。

アリトの後背には火の山の熱い蒸気と噴煙が立ち込めている。

火口の上昇気流につれて吹き込んで行く冷えた風が、王の額に頬に透き通るような緑髪を打ちつける。

王・リランは、うつ向いて瞑目したまま、アリトにだけ聞こえる声で話し始めた。

白い顔の中で一点だけ血のように紅い唇がかすかに震える。昨夜一晩彼女が泣き続けて一睡だにしていない事を知っているのは鋭、唯一人なのだ。知るものは、忠実な参謀をのぞけばだれ一人としていない。

「王子ラーリエクター、残念だけれどあなたに死んでもらわなければならない。

我々……わたしとリレキスは……あなたの言う通り、地球で、ある程度特殊な教育を受けて来た。だからあなたの謀略の存在にはすぐ気づく事ができたし、気づいてなおしばらくは手出しができなかった程、あなたのマキャベリは完璧だった。

わたし……わたしも、常に自分がマキャベリストであるよう規定して来たし、また鋭の助けを得てそれに成功しても来た。火花を散らす様な頭脳戦を経験するのだからこれが初めてと言うわけではない。……だけど誰もあなたにはかなわない」

……………何が言いたいのだ？……………

アリトの黒い瞳の奥で微かな炎がゆらぐのを、しかし瞑目したままのラリンは見る事がなかった。

「わたしが女だという事は知っていますね？」

ばかり、と、蓮の花の目覚める時のような音を、アリトは聞いたように思う。眼前に、一晩中泣きはらした、しかし哀しい程に澄んだ光をたたえている青味がかった黒緑色の王の瞳が彼を見つめていた。

「わたしは危機皇の世継、マルラインの炎の皇女マーライシャ。……こんな事は言うべきではないのかも知れない。それでも……

1人の人間として、わたしは、あなたに強く魅かれました、アリト。わたしは……」

絶句した王……いや皇女が辛そうにゆがめた顔を背けたのと、これを最後とばかりにアリトが火口へと身を躍らせたのと、一体どちらが先だったのかは誰にも解らない。ただ、煮えたぎる炎の中へ落下するまでのほんの数瞬の間、爆発するような彼の最後の思惟のかけらを、鋭（リレキス）は聴いたように思った。

……ソノ言葉ヲモット早くニ聞キタカッタゼりらん……

モシ……モシモ縁ガアッタラナ、りらん……

次ノ世界デ、マタ合オウ……!!

見まもっていた人々の歓声とも安堵ともつかぬどよめきが湧き上がった。疲れきった皇女の心にはそれすらが遙かな雷のとどろきのように遠いのに、それでも少女は少年王リランとしての演技を機械的にし続けている。終わったんだ、これで全てが終わったのだわ……と、心のどこかでつぶやき繰り返しながら。

自分自身がその現実に納得するまで。

そんな彼女をかばうようにつき従いながらリレキス・清峰鋭は考えるともなく思っている。ああ、2人っきりになったらすぐ、彼の最後の想いをマーシャに話してやろうと。それから、自分が超能力者であるという事は、あるいは本当の事かも知れないと。

噴煙たれこめる火の山の火口に、今は北からの雪が降り始めている。

少年王リランが叔父君に王位を譲って、何処へともなく行方をくらましたのは、それからわずか1と月にもならないうちの事だった。……

-----  
☆ 第二部に関して。

実は王子ラーリエクトールとは1人ではなかった。一心同体だと言う瓜二つの兄王子の存在を聞かされて動揺するマーシャ。

彼からマーシャの護衛を言いつかって来た妖女（あやめ）と棘皮（じんぴ）は危機に陥った時マーシャだけをさらい出してボルドム界に連れ去ってしまうが……さて。

なんかかなりいー加減でスベオベ調だなァ……。

敵地彷徨編に続く。



2006年7月26日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

「.....なんのために、闘っているのだろう。」

そんなある日、死者の埋葬の終わらぬ草原を見渡しながら、リレク・イス参謀はぽつりと呟やいた。

「なんのため？ おいおい、人死にを見て弱気になっているわけじゃあるまいな」  
将軍マダロ・シャサが言う。

「鋭はどうしてもそういった事を考えてしまう質（たち）なのよ。あなたより、少うしばかり  
思慮が深くできているのね」

人の脂に鈍った刃を自らとぐ手を休めて皇女は茶々を入れた。

「力押しの能なし将軍ですいませんなァ、陛下」

皇女とそれにつき従う腹心の参謀とが陣の内を連れだって歩いている。

軍議も既にとどこおりなく終了し、夕闇の中、野営の仕度の騒しさに紛れる、しばしの静寂。...  
...やがて、ことさらに沈黙を破るといふ風でもなしに、リレキスは云った。

「別に、ダレムアトがボルドム軍をたおすことに関してどうこう言うわけではないよ、念の  
ため」

「判っているわ。仮に、責められたとしたって今更わたしは何とも思わないでしょうしね」

「人が、生ける者が、何の為に相争うのか.....そんな巨大な命題は、今のわたしにはどうしても  
構わない事だわ。多くの人を流させて、その罪と矛盾性を確かに自覚しつつもちこたえるだ  
けの強さも、あるつもりだし。

深遠な哲学など無用よ。戦って勝つ。大地の民のために大地をとりかえす。

.....正義だとか、権利だとか、そんな大義名分も要らないし、まして信じてもないわ。

わたしはわたしの民の.....いいえ、わたし自身が生きのびるために、毎日毎日闘っては相手を  
たおしていくんだわ。この手をどっぷり血に染めてもね。どんな罪の意識に耐えてでも、何があ  
ろうとも、わたしは生きていることが好きだから、生きていたいから。.....

これが、唯一の殺人の正当性ではなくて？」

「そうだね」

適確な殺人指令を下す参謀は静かに微笑して肯いた。皇女は嘆息する。

「あなたには、こういう考え方が出来ないんだわね。本当に何故かしら。

わたし達、お互いの事なら全て解っている。かなり近しい魂を持っている筈なのに.....  
視ているもの、生きている世界が、まるっきり別なのだわね。」

長戦のさなかの、おだやかな夕暮れの一情景である。皇女も、リレキス自身も、彼の目が近頃



しばしば空の彼方や心の深みに向けられてしまっている事実、気がついていたのだ。

リステラス星圏史略  
古資料ファイル 4-6  
『皇女戦記』（暗洞界編）

<http://p.booklog.jp/book/108652>

著者：霧樹里守 is 土岐真扉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/108652>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/108652>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ